



カナダ国会議事堂内で乱射事件

異様な「宗教軍事国家」の正体
 イスラム国を
 封鎖せよ

制圧した油田の上りだけで年十二億ドル！
 戦闘機まで持つ彼らに世界は対抗できるのか



指導者バクダディ 容疑者とみられる人物



欧米人ジャーナリストの 処刑が続く



山内 今年の半ばからアラブ世界を攪乱してきた「イスラム国（IS）」ですが、ついに騒ぎは西側世界まで飛び火しました。十月下旬に、カナダで二つの事件が起きています。二十日にモントリオール近郊でカナダ軍兵士二人が車にはねられ、一人が死亡、二十二日には、首都オタワの国会内で、男が銃を乱射しました。犯人はいずれもイスラム国への参加を希望し、当局が監視対

象にしていた人物だといえます。中山 この二人の間には関係はなかったようですが、カナダ国籍でイスラム教に改宗した男たちのようですね。山内 この事件は、イスラム国問題のひとつの転機となる可能性もあります。そもそもアルカイダのような従来のイスラム過激派組織と違って、イスラム国は西側世界でテロを実行し

てきませんでした。これは、「アラブの春」以降の民主化運動の影響で、過激派組織の一部が、欧米などの外国より自分たちが暮らす中東の権力と対決する、という方向に変わったことが大きい。外向きだったハード運動が、ある種内向きに変わってきたと見られていました。ところが、九月にアメリカ主導でシリア空爆が決まると、インターネット上で、「有志国連合に参加して

いる国の市民も含め、欧米の不信心を殺せ」というイスラム国の声明が出されました。その影響がはじまっているのでしょうか。

イスラム国は「国家」なのか

中山 イスラム国というのは、いろんな意味で、これまでの過激派組織とは異なる印象があります。例えばアルカイダに参加しようとする人々には、国際ジハード運動としてのテロが動機にあったわけですが、今回は、イスラム国に行つて警察官をやりたいという動機を口にする人もいますね。彼らはイスラム国という大きな「実験」に参加したいと考えている。これは「自由からの逃走」の現代版と言えるかもしれない。そこで、山内先生におうかがいしたいのですが、まず、そもそもどうしてこれほど急速にイスラム国は勢

力を拡大できたのでしょうか。山内 理由は大きく二つあります。まず、「アラブの春」以降のイスラム世界の混乱にうまく乗ったことですね。イスラム国はもともとイラク北部のスナ派地域を拠点としたアルカイダ傘下の組織でした。それが、シリア内戦に、「イラク・シリアのイスラム国」(ISIS)と名乗りをあげて軍事介入し、シリア派系のアラウィー派のアサド政権を攻撃します。次いでイラクに戻り、ここでもシリア派のマリキ政権を攻撃します。シリアでは少数派のシリア派系によって多数派のスナ派が支配され、イラクでは多数派のシリア派に少数派のスナ派が抑圧された。いずれにせよ、スナ派のあたかも代弁者としてイスラム国は勢力を伸ばしたわけです。次の段階では、同じスナ派の中で、対立する自由シリア軍などを攻

撃しますが、ここでは自分たちが信じる教え以外を異端として、その断罪のために戦う「タクフィール」というイスラム純化の論理を持ち出しています。いずれにせよ、イスラムの論理を上手に使うて勢力を拡大したことは間違いありません。しかし、それだけではここまで大きくはならなかったでしょう。膨張を可能にしたのがオバマ政権によるアメリカの中東政治の舞台からの離脱です。これによって生まれた政治的、あるいは戦略的な真空状態の出現が、イスラム国の台頭を促したと言えます。アメリカの問題は、あとでじっくり議論するとして、イスラム国についてまず触れると、この組織がユニークなのは、アルカイダも実現したことがない、「国家」と自称する擬似統治体を実質的に作るように動き出したことです。中山 この「国家」というニュア

ンスが我々にはわかりにくいですね。イスラム國は領域支配をしていると報道されていますが、実際には都市という点を押さえているだけのように見えます。これでどの程度支配できているのでしょうか。

原油密売が資金源

山内 そのアラブという土地の性格と関係しています。イスラム國が支配しているイラク北部からシリア東部にかけての地域は、シャーム砂漠（シリア砂漠）が広がっており、海に船が浮かんでいるようにどこどころに都市がある構造なのです。だから点を押さえ、点と点の間のルートを押さえれば、ある種の支配が成り立ちます。

イスラム國では、このルートに關所を設けて、通行税を取り立てているようですが、砂漠の交易や人的往來の交通上、このルートを避けるのは関係者にとり死活問題なので、税収入は相当あるといえます。経済的基盤という点では、この關所通行税のほかに、人質身代金も大きい。十月に外国人監禁の過酷な実態が明らかになりましたが、一説には一部の人質は一人当たり約二百万ユーロ（約二億七千四百万円）の身代金を払って解放されたそうです。

最新型を含む兵器を遺棄して遁走した。これを丸ごと接収して、いよいよ軍事力が高まってしまった。戦闘機を保有したとの報道もあり、軍事的に強大化している事実は重要です。

中山 支配の実効性や資金力、軍事力についてはわかりましたが、彼らの目ざす「カリフ制イスラム國家の復活」も、よくわかりません。

山内 彼らの唱える「イスラム國家」というものは、勤労に励み家族との団欒に幸せを求めめる一般のイスラム教徒にとって、「理念」としてはともかく、「現実」としては受け入れがたいものであることをまず理解してください。アラブ世界の大多数の人たちは、現実には我々とあまり変わらない國家観に立っています。つまり、エジプトとかトルコといった領域國家を認めて、それぞれ國の中で生きています。

その上で説明すると、イスラム國

しかし、なんといっても油田やガス田を押さえたことが、イスラム國の強さの源泉であることは間違いないと思います。この点が、タリバンとは大きく異なります。アフガニスタンには原油も天然ガスも出ませんからね。九月下旬現在、イスラム國はシリア国内だけでもラッカとデルゾールなどで八つの油田とガス田を支配下においています。イラクでは日量約三万バレル、シリアにいたっては日量五万バレルもの生産があり、こ

を理解するには、イスラムの歴史的發展を踏まえる必要があります。

イスラム社會は、七世紀にムハンマドが作ったイスラム教団であり共同体である「ウンマ」をもとに広がっていきました。イスラム教は、本質的に言えば、民族や人種などの差異を否定し、普遍的な価値観で神の下における平等を唱えるという宗教ですから、國という体裁も名前も当初は必要なかったのです。

しかし、この理念はムハンマドの死後、早くも限界を露呈します。教団國家ともいべき統治体はムハンマドの判断によって全てが決定されていたので、彼がいなくなると、分裂、解体の危機に瀕した。そこで、神の予言者、すなわちムハンマドの代理人として、カリフが選ばれた。ただ、正統カリフは四代しか続かず、ウマイヤ朝、アッバース朝、フ

アッティマ朝など、すべて世襲化され

れらはヨルダンやトルコの闇市場で売られている。国際市場で一バレル当たり百ドルを切るくらいで取引されている原油を、四十ドルという格安価格で売るといふダンピングをやっているのです。原油の出ない周辺諸國はどうしても手を出してしまう。

おかげで表の市場の原油価格も下落しているほどです。この原油の闇販売で、毎日約三百二十万ドル、年で約十二億ドルを得る計算になる。

中山 先日、バイデン米副大統領が、トルコや周辺國への不信感について、つい口を滑らせたのはそういう事情があるためですね。

山内 その通りです。資金が豊富な上、軍事力もどんどん充実しています。兵員数は六月の六千人から、九月には三万人を超えたとされます。さらに悪いことに、イスラム國に追い立てられたイラク軍が、アメリカから供与された一個師団規模の

れた、王朝國家になるわけです。その後、近代以降西洋との接触によって、統治権を持つて國民を支配し、徴税や徴兵の義務を課すという、我々の考える「國家」の実質が強まり、信仰共同体としての國家の性格が稀薄になります。それでもウンマの理念は脈々とあつて、カリフ職を継承したオスマン帝國にしても、実は正式な國名はありませんでした。

中山 そのオスマン帝國も一九二三年に解体し、カリフも消滅した。第一次大戦中、英仏露が秘密裡に結んだサイクス・ピコ協定が大きな枠組みとなって、現在の形が定まっています。そこからは、我々の考える國家と近い形でアラブ世界も存在してきただと思ふのです。

山内 だからイスラム國は、サイクス・ピコ協定を否定し、カリフ制イスラム國家を復活させると言っているのです。この六月、トルコの東

アナトリアの山から下りて来たとき、テレビを見て驚きました。画面にイスラム国戦士が登場し、実際は見えませんがサイクス・ピコ協定の線をまたいで、「この線はもう意味がない」と声高に宣言していたからです。

帝国主義の領土分割を、理念としてイスラム教徒は拒否しますし、西欧的な枠組みを打破することには共感もある。実際、過去に一度だけ、本格的な挑戦をした例がありました。それは、サダム・フセインのクウェート侵攻と併合です。クウェートは、イギリスが石油地域をイラクから奪い取るため、サバーハ王朝を担いでイラクから分離させた人工的な国家であり、イラクには取り戻す権利がある、とフセインは主張したわけですが。忌まわしき行為だけでなく、挑戦という点で、彼をアラブの英雄ともてはやす風潮も一部にはあ

見ていると思いますよ。イスラム圏の支配下にある民衆も、それを喜ぶわけではなく、力と恐怖によって押さえつけられている側面が強いはずで、こういった苛烈な刑罰による支配が行われていることは、イスラム社会のイメージと普遍性にとっても大きな悲劇と不幸なのです。

中山 私も、不幸なことだと思ふのは、イスラム教の本質にこうした残虐な行為を生み出すものがあるんじゃないかという、ある種の偏見を他の世界の人たちの多くが持っている、イスラム国の厳しい刑罰や女性を蔑視した扱いといった行為がその偏見を増幅させてしまっていることなんです。

山内 女性の奴隷を復活するなどということばまさにその最たるものですね。七世紀の文脈で、一夫多妻や、奴隷として女性をいくら所有してもいいということをコーランから

った。結果、二回の戦争によって彼は支配力を失い、生命さえ奪われた。イスラム国はフセインが戦争によっても実現できなかったことに手を付けたという一面があるのです。

中山 西欧的な枠組みを打破するという主張が民衆に受け入れられる要素があったことはわかりませんが、アラブの一般の人たちは、本当にイスラム国のリーダーを正統なカリフとして認め、支持しているとはなかなか考えられません。

山内 イスラム国のリーダーはアブー・バクル・アル・バグダディ（バグダッド出身のアブー・バクルの意味）と名乗っていますが、おそらく本名ではなく、初代正統カリフの名であるアブー・バクルとアッバース朝の首都であったバグダードを連想させたかったのでしょうか。ムハンマドとカリフの正統的な教えを継承していると民衆にイメージさせるの

読み取ることはたしかに可能でしょうが、国際秩序の妥協的維持と文明間の協調という理屈からできている現代世界で、奴隷の所有を公然と奨励できるわけがないでしょうね。現代世界の感覚とは著しくかけ離れていると言わざるを得ない。

オバマは中東に関心が無い

中山 ここから、アメリカを中心とした国際社会の対応について議論をしたいのですが、最初に山内先生が言われたように、イスラム国を大きくした責任の少なくとも一部はアメリカにあります。

オバマ政権が誕生した大きな要因として、二〇〇〇年代、ブッシュ政権による過剰介入に対する反省とリセットがあったと思います。具体的には、イラク戦争、アフガン戦争の教訓から、大規模な軍隊を現地に派遣

が狙いでしょうが、そういう名前とカリフを名乗っただけで正統性が生まれるかといえ、そんなこと誰も決めようがない。普通のイスラム教徒にとっては、困惑以上の意味はあまりないでしょうね。

中山 YouTubeで公開されたアメリカ人やイギリス人の斬首刑のインパクトは相当大きく、最終的にはオバマ大統領も空爆に踏み切らざるをえなかったのですが、あれはイスラム圏の一部では、刑罰として行われているわけですよ。もちろん手続きを踏んでなのでしょうが。

山内 たしかにサウジやイランでは、コーランで刑罰が固定されたものとして、死刑以外に石打ちや指の切断なども行われています。ただし、イスラム世界全体がそうではありません。ほとんどのアラブ国家では固定刑は行われていないし、アラブの普通の市民は、眉をひそめて

して軍事的に解決するという方法を見直し、イラクから撤退し、なおかつアフガニスタンからも撤退中です。しかし、ただ引き下がるだけでは戦略として成立しないので、政権が発足してすぐに、まずはトルコで、次いでカイロで、イスラム世界への対話の呼び掛けを行った。しかし、すぐに「アラブの春」が起こり、これ以降、オバマ政権は後手後手の対応に終始することになった。オバマ

備前岡山
安政三年創業
廣榮堂本店
岡山市中納言角
電話(086)271-1368

政権は、中東におけるアメリカの足あとを小さくすることそれ自体を自己目的化した結果、力の空白が生まれ、イスラム国の台頭を結果として許してしまった側面がある。

もう少しマクロな視点で眺めてみます。言葉でこそ言いませんが、オバマ政権の基本的な世界認識というのは、「アメリカ後の世界」、つまり、アメリカの力が相対的に低下しているということを認めている政権です。アメリカは自分がコントロールできない世界に直面している。そこでどうやってリーダーシップを発揮していくかといえば、合意形成の場で主導権を握るといようなイメージです。いわば力の垂直的な行使ではなく、水平的な行使です。

つまり、オバマ政権がこれまでの政権と違うのは、アメリカが力行使して国際秩序を作っていくというビジョンを意識的に排除した政権で

(笑)。あまり関心がないんでしょね。しかし、手を引きますから、あとは皆さんでやってくださいといっですむような簡単な地域ではないんですよ、中東は。

スタッフ交代が必須

中山 乗り気でない様子は空爆作戦の推移からも見てとれます。これまでも、コソボのように空爆のみの作戦もありましたが、今回の攻撃回数には圧倒的に少ないですし、ペンタゴンによる記者発表がほとんどない。発表される攻撃対象リストを見ても、数台の戦車とか武装トラックとかわずかしか出ていない。つまりなかなかはつきりとした成果をあげられないということなんだと思います。そもそも、作戦名すら決まっておらず、二カ月経ってようやく名付けられたのが「Inherent Resolve

あるところにある。これまではドクトリンという形で、どのように力行使してどういう秩序を作るかということが世界に対して示され、それが予測可能性をもつ国際秩序を作り上げていた。こういうことをすればアメリカはこう反応してくるに違いない、と。しかしオバマ政権は意識的にそれを排除したことによって、アメリカの行動の予測可能性が低下して、国際秩序を脅かす事態が次々と起きているのが現状だと思えます。それは直接的な因果関係にはありませんが、そのような問題が発生しやすい状況をつくった。

山内 イスラム国に関していえば、当初、シリア内戦に軍事介入したイスラム国の行動を、オバマは黙認していた節がありますね。それは、アサド政権とスンナ派の対決が紛糾すると、シリアのみならず、革命防衛隊を派兵しアサド政権を支援

(変わらぬ決意)。どうにも勢いが無い名前ですね。逆に決意がないんじゃないかと穿った見方をしてしまいうような名称です。

また、なぜアメリカが、イスラム国の存在を脅威として認定するのが遅くなったのか。オバマ政権は、ブッシュ政権下で行われていた対テロ戦争は基本的に間違っていたというスタンスでした。ですから、アメリカが引き上げてできた真空状態のせいでイスラム国が台頭してきたと認めること自体、オバマ外交の失敗を認めることになるため、なかなか認められなかった。しかし、同時にアメリカ国民自身も非常に内向き志向になったということもあって、オバマ政権と国民は、ある種の共犯関係で、イスラム国を見て見ぬふりしていたのです。

いまオバマ大統領がやっていることは、「世界に過剰介入はしたくない

しているイランの力も弱めることができるので、放置するのが得策だという判断だったはずですよ。しかし、イスラム国はイラク北部に勢力を拡大し、アメリカ人ジャーナリスト二人が殺害されたことで、急遽方針を転換せざるを得なくなりました。今頃になって、CIAがイスラム国をきちんと分析できなかったと責任転嫁しています。CIAの中東担当官たちは警告を発していたのです。

そもそも、オバマの中東問題への関心は、相当低いのではないかとすら思いますね。というのも、シリア問題に関する大統領主権の安全保障会議でのオバマの不真面目な態度がメディアにすっぱ抜かれたのです。冒頭からオバマは実に退屈そうにしていて、だんだん姿勢もだらしないくなり、しまいにチャシューインガムをクチャクチャ噛みながら携帯電話のブラックベリーをいじりだした

い」というアメリカ国民の気分と合致しているんです。そうした世論を見れば、地上軍は派遣しないと頑なにオバマが主張しているのにもうなげけません。ところが、オバマ大統領の支持率が四〇パーセント台前半のに対し、対イスラム国政策についての支持率は三〇パーセント台前半と低迷している。国民が望んでいることをやっているけれど、支持を得られていない。やはり強いアメリカでいてほしいけれど、ブッシュ政権時代の過剰な介入を繰り返したくない。自分にとっての脅威は叩き潰してほしいけど、直接アメリカに関わらない面倒なことはタッチしたくない……こういった矛盾する気持ちが見られているのではないのでしょうか。それを新孤立主義と呼ぶ人もいますが、より一般的には「リトレンチメント」と呼ばれています。

山内 トレンチ、つまり塹壕に閉

じこもるということです。

中山 先月、アメリカに行ったときに多くの人が指摘していたのは、オバマ外交をいまこそリセットしなければいけないということでした。そのためには、スタッフの罷免も辞さない覚悟が必要だと。かなり大胆な人の入れ替えが必要だという人もいました。担当者レベルではダメだということです。国家安全保障問題担当大統領補佐官のスーザン・ライスの名前を上げる人もいました。

山内 まったく賛成です。東・南シナ海、尖閣の問題にしても、彼女が理解できているとは思えない。アフガン、イラン、イラク、パレスチナとイスラエルという四つのファクターが複雑に絡み合った中東問題も全然読み取れないと思います。

中山 いまアメリカは、パンデミックの恐怖におののくポストモダンの状況、力が削ぎ出しの十九世紀的

国問題は中間選挙の直接的な争点にはなっていないませんが、オバマ大統領への不信感の一部を構成しています。それは、さきほど言いましたオバマ大統領がアメリカの衰退を事実上容認しているということに對する違和感、あるいはイスラム国に對して決然とした対応をとれていないということへの不信感です。オバマの生み出した空白後、アメリカがどういう形で秩序を形成していくのか。二〇一六年の大統領選挙は、そうした世界観が問われることになるでしょうね。

山内 イスラム国がイスラエルの安全保障上、实际的に脅威になるような段階になったり、イスラム国によって直接的、間接的な挑戦を加えられるようになったとき、アメリカの世論は劇的に変わる可能性があると思います。

中山 今後、世界はイスラム国に

状況、そして主権国家の存在を否定

し、奴隸制をも容認するブレモダンの野蛮に直面し、こうした複合的な問題状況に對応できる新しい時代のアメリカ外交の輪郭を示さなければなりません。オバマ政権にはそれができていない。オバマ政権一期目は、「撤退」が全体としてうまく機能しているかのように見えました。

しかし、二期目になると撤退の負の効果はかなりはつきりとしたかたちででてきた。それがすべてライスの責任というわけではないでしょう。

しかし、オバマ政権が本格的に外交をリセットするならば、それを實質的にも象徴的にも内外に示す必要があります。国務長官や国防長官を解任ということになると、かなり大ごとになるので、ホワイトハウスの人事としてライスを入れ替えるのが必要だというロジックです。無論、人を替えるだけではダメで、発想も根

対してどのように対応していくべきでしょうか。

山内 まずイスラム国を孤立させることでしょうか。繰り返しになりますが、イスラム国は現在の中東を構成している国境、そして国民国家の存在を否定しようとしています。国際秩序に枠があるという考えを否定する思考は、すべての国にとって脅威であり、容認できることではありません。その点で、サウジアラビアや湾岸諸国、ひいてはヨーロッパ諸国、アメリカ、みんな一致している。さらに、アラブやイランとは相容れないイスラエルにしても、イラク北部のクルド人地域から石油を輸入しているため、同地の安定にイスラム国排除は絶対に必要という事情を抱えています。いまはイスラム国排除に大同団結できるまたとない機会だという見方もありうるのです。

第二に、欧米や中東の国々の若者

本的に転換しなければならない。皮肉なことに、オバマ政権が見習うべきなのは、二〇〇六年にブッシュ・ドクトリンを根本から見直したブッシュ政権だという人もいました。

対イスラム国で大同団結を

山内 オバマ政権の問題点は、口ではいろいろ言うが、結果が伴わない「偽善性」にあると思います。例えば、就任当初、パレスチナ人の支持は五割近くで、これほど高い期待を集めた大統領はいなかったんです。アフガン、イラン、イラク、パレスチナ問題に関してアドバイザーや顧問を配置する着眼も良かった。しかし蓋を開ければ、イスラエルとの関係は最悪の状態となり、解決の糸口すら見つからない状況でしょう。

中山 理念を政策にうまく落とし込んでいけないのです。イスラム国にとって、イスラム国を流行であるかのように思わせず、犯罪やテロに関与させないという強いメッセージを政治が打ち出すことが大切です。カナダの事件後、これはますます重要になるでしょう。

そして第三に、国連決議を経て、国際的に共通した世論を形成することが必要でしょうね。

中山 アメリカが二〇〇〇年代に経験した挫折によって、国内で退却機運が高まったことは、世界にとつて良いニュースかというところ、おそらくそうではないと思うんです。むしろバッドニュースではないかと。内に籠ろうとする超大国のアメリカを、どうやって引張り出すかが大きな課題ですね。中東諸国が主体になって、アメリカを巻き込んでゆく。それは東アジアでも同じで、アメリカを巻き込んで秩序形成を考えていくことが大事だと思います。